

佐々木家茶室「初心庵」

八代研究室

00212035 佐々木幸史郎

配置 三畳台目 高さ

1. はじめに

佐々木家は、岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里一丁目に位置し、約140坪の敷地に約49坪の主屋と南庭に倉庫が存在する。本計画では、倉庫を解体し、そこに茶室を建築することとした。茶室設計にあたっては、部材一つ一つの持つ意味や、創出された空間で人がどう立ち振る舞い、何を感じるのかなど、多くの要素を含んだものにしようと念頭に進めた。

茶室を設計することは勿論、大工としての道を歩むこれからの原点になるような、中身の濃い図面にするという思いから、この茶室を「初心庵」とした。

2. 配置

庭も含めた初心庵への動線として、客は梅軒門から入る前に主家に一度入り、身なりを整え、荷物を置き、門から内路地に入る。路地での客の動線は、北東に位置する梅軒門から入り、南西側へ進むと左に腰掛待合があり、ここで庭全体を眺め、落ち着いて季節の変化などを楽しめるように考えた。腰掛待合から北西側へ進んで行くと、蹲踞に至り、そこで心身を清める。客をもてなそうとしている亭主に会うための気持ち転換を行う。さらに蹲踞から南側に進み躡口へと至る。一方、亭主の動線は主家の裏側（北側）から南側へ進み、建物の西側に面する玄関から茶室へ入る。庭には竹垣があり、客と直接顔を会わす事が無いようにした（図1）。

3. 初心庵

初心庵は図2からも分かるように、三畳台目、中柱出炉の席で、躡口の正面に床の間がある。客は席入りの際には、床の間の掛け物を読んで今日の茶会の趣旨を感じる。茶室は奥行きを出すために、躡口

側から点前座側へ平三畳台目の間取りとし、客座上は野根板の平天井、点前座上は蒲の落ち天井の二段構成になっており、亭主と客の茶事上での立場の位置付けを明確に表している。窓は点前座の風炉先窓、客座の連子窓、下地窓、床の間の墨蹟窓の四ヶ所で、出来るだけ自然な陰影を演出するために、無駄な光が入り込まないようにした。

4. 高さ

茶室設計は建物全体の高さをいかに低く抑えるかが肝要であり、茶室から庭も含めて、人に自然を感じさせ、素朴な雰囲気を与える事を心がけた（図4）。図3.5からも分かるように、屋根を低くすると、必然的に全体の高さ寸法が一般住宅に比べ低くなり、納まり等にも気をくばる設計となる。とくに、構造的に重要な貫の寸法を考えながら天井高、鴨居、建具の寸法を決定し、なおかつ、茶室の古典のきまりも考慮しながら場所に応じて変える必要があった。

5. まとめ

今回の設計では、実家を題材に、一般住宅の庭にも実現可能な茶室設計を造り上げることを目指した。設計を終えて改めて感じた事は、いかに使用者の用途に合ったものにするかが重要であると改めて思う。造り手側と施主側の話し合い、造り手側は何より実際行われるイメージを常に描き、完成まで進めることが必要だと肝に銘じた。

【謝辞】

本設計を行うにあたり、宮城県仙台市の（株）気仙沼工務店佐藤社長に、多大なご指導を頂きました。ここに記し深謝いたします。

【参考文献】

- 1) 中村昌生：古典に学ぶ茶室の設計
- 2) 建築工程図編集委員会：①数奇屋（茶室）
- 3) 岡田孝男：茶室平面集

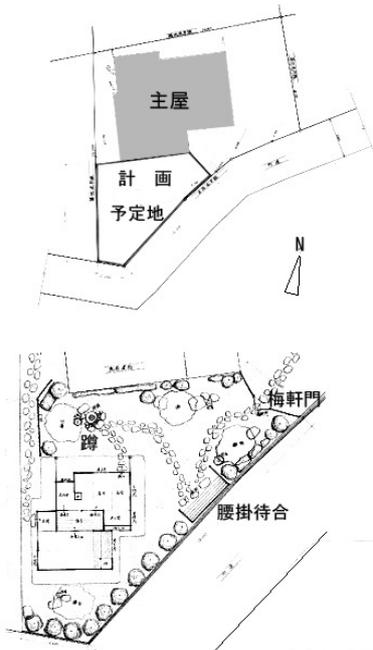


図1 配置図

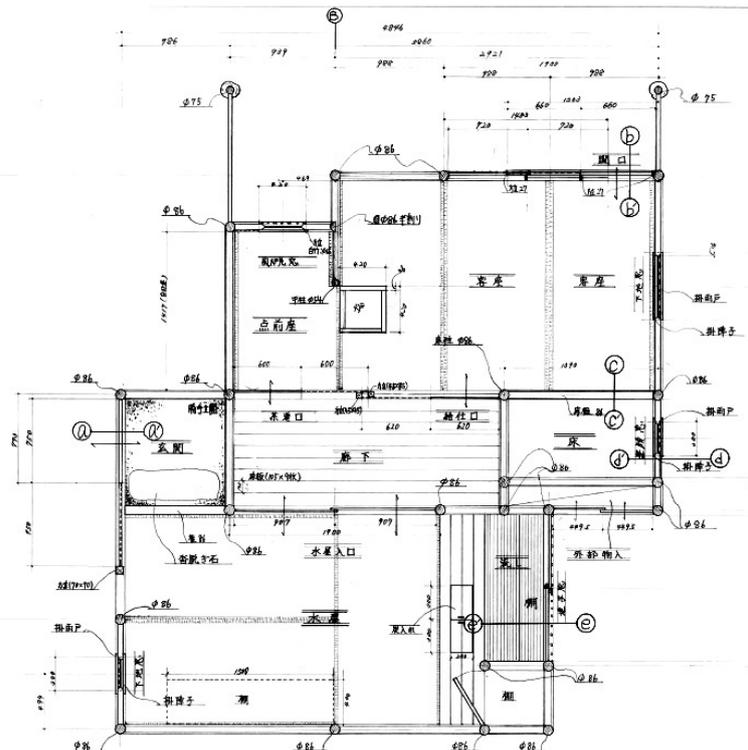


図2 平面詳細図

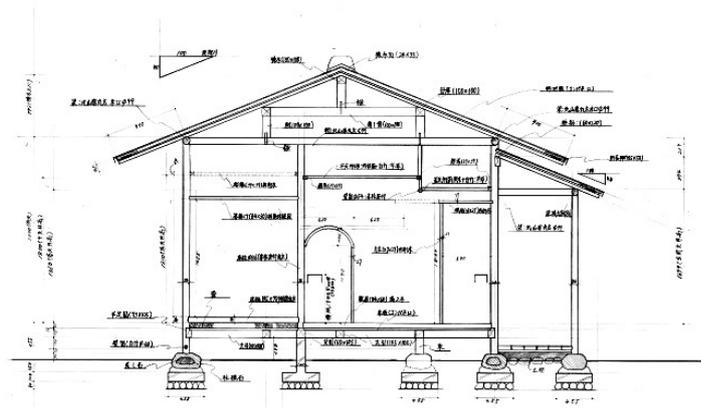


図3 断面詳細図(矩計)

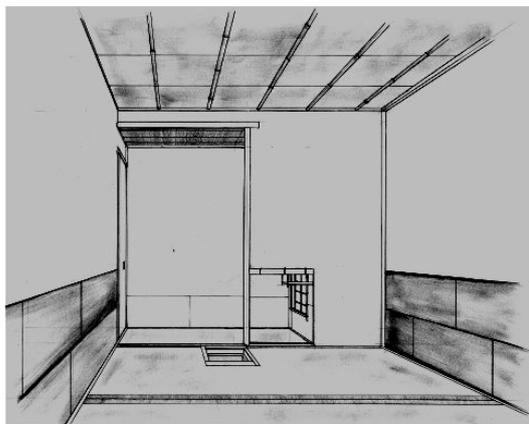


図4 内観透視図

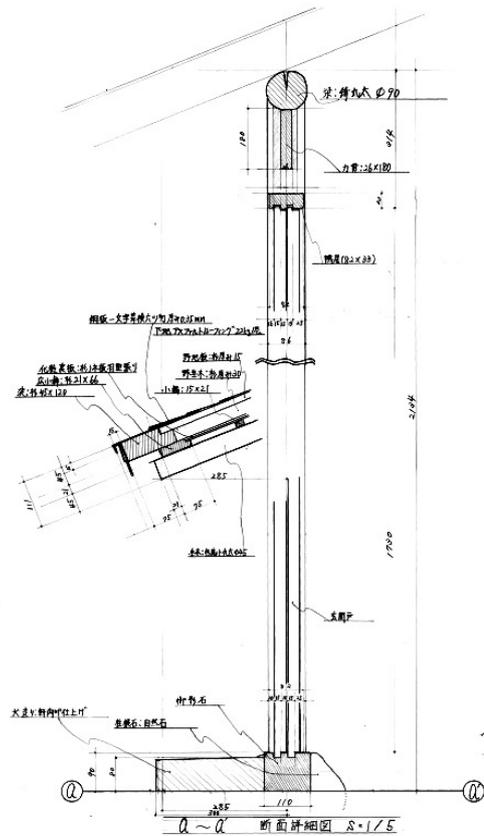


図5 玄関詳細図